

『親心』

55

年も前、私の大学受験の時の話です。とある大学を第一志望にして、一つだけ滑り止めに首都圏の私立大学を受けさせてもらいました。滑り止めですから、合格圏内の大学です。合格発表があり、すぐ入学手続き、そして入学金を納めなくてはなりません。親としては多額の出費だったと思います。第一志望に合格すれば、無駄になる出費ですが、親はそんなことは厭わず、早速入学金を振り込んでくれました。有難いと思いますが、私には親に内緒の企てがありました。第一志望の大学受験の前日、意を決して、明日の大学入試には行かないと両親に宣言しました。さぞや大目玉を食らうだろうと覚悟していました。しかし、父も母も驚くこともなく怒りもしません。拍子抜けした私に、父は静かに、そうだろうと母さんと話していたと言いました。母も、何となく分かるんだよ息子のことだからと、咳くように言ったように記憶しています。そんな両親に私の方が驚きました。昭和44年のこと、東大の入試が学園紛争で中止になったように、学生運動が激しい時でした。母は学生運動だけは絶対しないように、そして山岳部には絶対入らないようにと言っただけでした。次の日から、私の上京の準備に、母は忙しく動いてくれました。

私

は一人っ子で育ちましたが、甘やかされたりしませんでした。母は厳しい人でした。家事の手伝いはよくさせられました。掃除、食事の後片付けは勿論、ボタン付けなどもしました。しかし、母の愛情はしっかりと私に伝わっていました。母が厳しい分、父は優しく穏やかな人でした。そういう点ではバランスのとれた両親だったと思います。

上

京する前日、チッキ(国鉄時代、乗車切符があれば、格安で布団袋などの大きな荷物を目的地まで送ってくれるサービス)で布

団袋を送ると、あとは明日私が上京するだけになりました。次の日、朝食が済み3時頃になると、母は熱っぽいから少し横になるといつて寝室に入りました。もう少したら、上京するためにバスで青森へ行くという時でした。いよいよ出発。寝室の襖を細く開けて母に声を掛けると、気を付けて行きなさいと小さな声が聞こえてきました。父は玄関先で見送ってくれました。

上

野行き夜行列車に乗るために、まずバスで青森に出ます。このバスは、我が家の店舗の前を通過するのですが、その時、バスの窓から我が家を見ると父は接客中で私が乗っているバスに気づきません。勿論、母の姿は見えません。淋しい思いで、バスに揺られながら青森に着き、生まれて初めての一人旅、上野まで12時間あまりもかかる夜行列車に乗り込みました。駅の薄暗いホームを今でも思い出します。4人がけボックス席の窓側に指定席がとれていました。私は汽車が動き出すと直ぐ、鞆の中からおにぎりを取り出しました。若いって良いですね。どんな時でもお腹が空くのです。母が昼食時に作ってくれたおにぎりは傍目を気にするほど大きく、しかも5個もありました。2個は夕食用、あと2つは明日の朝用、あと1個は予備ですと見慣れた母の字のメモが添えられていました。具合が悪いのにおにぎりを作ってくれた母を思うと、胸が熱くなりました。

後

日談になります。青森に帰り教員として働き始めた頃、母さんには内緒で教えるが、お前が一人で東京に行く時、あの勝ち気な母さんは淋しくて泣き出してしまっそうで、仮病を使って見送りしなかったのだと教えてくれました。

両

「親思う心に勝る親心」
親は既にあの世とやりに旅立ってしまいましたが、父母は何時までも私の中で有難く息づいているのです。